

研究計画ハンドブック

～研究を有意義に進めるために～



武蔵野学院大学大学院

国際コミュニケーション研究科

国際コミュニケーション専攻（博士前期課程）

国際コミュニケーション専攻（博士後期課程）

目 次

はじめに	3
1 大学院の趣旨等	4
2 教育方針	4
3 教育上の理念、目的および養成する人材像	5
4 アドミッション・ポリシー	5
5 カリキュラム・ポリシー	7
6 ディプロマ・ポリシー	8
7 学位論文に係る評価の基準	10
8 学習から研究へ（博士前期課程への進学）	11
9 大学から大学院（博士前期課程）へ	14
10 研究計画書（博士前期課程 受験時）	17
11 研究計画書（博士後期課程 受験時）	17
12 研究計画書と受験における面接	18
13 合格後から入学前までの事前指導	18
14 入学後の研究について（博士前期課程・博士後期課程 受験時）	19
15 入学後の研究計画	23
16 受験時提出書類 見本	24
17 武蔵野学院大学大学院・学位（博士論文）プログラム	30
18 留学生の皆さんへ	33

はじめに

『研究計画ハンドブック～研究を有意義に進めるために～』は本大学院博士前期課程及び博士後期課程の受験を考えている人、受験のために研究計画書をこれから提出しようとしている人、すでに入学を許可されてこれから研究計画書を提出する人の一助となるように作成したものである。

シェイクスピアの『ハムレット』に“*The readiness is all.*”という台詞がある。これは劇的には「覚悟が肝心だ」とよく日本語訳されるが、その原点は「準備がすべてだ」ということである。博士論文や修士論文は論文を書くこと自体に目が向けられがちであるが、最も重要なことは実は研究計画にある。すなわち、どんなに立派な建築物もその設計図が綿密に練られていなければ、工事は杜撰なものとなり、欠陥だらけの建造物が完成してしまうことになる。そうならないためには設計の段階で、できるだけ問題点を浮き彫りにさせていくことが重要である。もちろん、ある程度進めてみないと見えてこない問題点も出てくる。このような場合にはいったん立ち止まって計画を見直す勇気も必要である。

このハンドブックでは受験前、志願時の研究計画、入学後の研究計画の提出といった3段階について取り上げることにする。なお、入学後にはそれぞれ『履修の手引き&修士論文に関する要項』『履修の手引き&博士論文に関する要項』を用意しているので、具体的な記載方法はそちらを参考にしてもらいたい。また、特に入学後には研究指導教員の指導もあるので、研究指導教員とのコミュニケーションも重要となる。

本書の1～7は大学院の方針やポリシー等を掲載し、それ以降は学習から研究へ、研究するとは何か、学位の重さなどを意識して、研究が充実したものになるように、まずは、研究計画立案の重要性を認識して下さい。

1 大学院の趣旨等

本大学院の目的は学則第1条に以下のように定めている。

武蔵野学院大学大学院（以下「本大学院」という）は、建学の精神「他者理解」に基づき、広い視野に立って学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて高度な知識基盤社会を支える人材の育成を図ると共に、高度な学術研究への道を開き、もって我が国及び国際社会の発展と文化の進展に寄与することを目的とする。

建学の精神「他者理解」を中心に「我が国及び国際社会の発展と文化の進展に寄与すること」を目的にしている。寄与の仕方には様々あるが、高度な知識を備えた職業人として社会に貢献すること、また学術の理論及び応用を教授研究する研究者として社会に貢献することを目指してもらいたい。

2 教育方針

2-1 教育方針（国際コミュニケーション専攻博士前期課程）

- 1 国際コミュニケーションの専門的知識と実践力を備え、知識基盤社会を多様に支える、高度で知的な素養のある人材を養成し、国際社会に送り出していくこと、また将来的には、国際コミュニケーションに関する大学教員等を人材の育成を目指す。
- 2 自己と他者、日本文化と異文化、その「差異」を明確に認識した上で、なお「共通性」や「共感」に対する信頼と努力を忘れず、コミュニケーションを深める能力を備えた人材を育成する。
- 3 現実の変転著しい社会情勢に対応する高度知識基盤の形成を目指し、柔軟な思考と深い洞察、そして実社会との接点をふまえた主体的な行動力を備える人材を育成する。

2-2 教育方針（国際コミュニケーション専攻博士後期課程）

- 1 国際感覚を持ち、国際的舞台や大学、研究機関等で研究者として活躍しうる知識、言動、行動に加え、日中英語圏に関するコミュニケーション能力を有し、知識基盤社会をリードする高度な学識を備えた人材育成を目的とする。
- 2 国際コミュニケーションを実現する為に、高度なコミュニケーション・スキルとして語学を修得した上で、企業・経営、メディアにおけるコミュニケーションの応用スキル、日本の文化や政治・経済、また、米国を中心とした英語圏、中国などの地域ごとの深い理解力を身につけ、高度な学識を備え、学際的な教育・研究を行うことを教育研究の目的とする。
- 3 現代の国際社会においては、情報・通信等といった流通の発展、さらに人的交流により、日中英語圏の文化・言語・伝統・社会・政治・経済あるいは人々の生活様式、価値観が多様化する現代社会において、文化・文明の違いを乗り越え、積極的かつ自主的に他国の人々との交流に取り組み、他者理解を根底に置いた共生の理念をもって国際

的な相互理解を実現していくことが重要性であるところに理解させる。

3 教育上の理念、目的および養成する人材像

3-1 教育上の理念、目的および養成する人材像（国際コミュニケーション専攻博士前期課程）

- 1 知識基盤社会を支える高度な知的な素養を備えようとする人材。
- 2 国際感覚を持ち、国際的舞台や大学研究機関で研究者等として活躍しうる知識、行動力ならびに日中英語圏に関するコミュニケーション能力を有し、もって知識基盤社会をリードする高度な学識を備えようとする意欲のある人材。
- 3 高度なコミュニケーション・スキルとして、語学を修得した上で日中英語圏の文化的、政治的、経済的背景を、高度なレベルで理解、研究し、「他者理解」に基づく「共生的社会」を構築していこうとする問題意識を持ち多面的な日中英語圏の交流や相互の発展を企図しようとする人材。
- 4 「国際コミュニケーション」を掲げ、学際的な教育・研究を実施し、その教育・研究の専門家を目指す人材。

3-2 教育上の理念、目的および養成する人材像（国際コミュニケーション専攻博士後期課程）

知識基盤社会を支える高度な知的な素養を備えた人材養成への期待は、国際的なものとなっている。本専攻では国際感覚を持ち、国際的舞台や大学研究機関で研究者等として活躍しうる知識、行動力ならびに日中英語圏に関するコミュニケーション能力を有し、もって知識基盤社会をリードする高度な学識を備えた人材育成を目的とする。そこで、高度なコミュニケーション・スキルとして、語学を修得した上で日中英語圏の文化的、政治的、経済的背景を、高度なレベルで理解、研究し、「他者理解」に基づく「共生的社会」を構築していこうとする問題意識を持ち多面的な日中英語圏の交流や相互の発展を企図する。本専攻はこうした必要性に対応するものとして、「国際コミュニケーション」を掲げ、学際的な教育・研究を実施し、その教育・研究の専門家の養成を目的とする。

4 アドミッション・ポリシー

4-1 アドミッション・ポリシー（国際コミュニケーション専攻博士前期課程）

本学では入学試験形態によりアドミッションポリシーをそれぞれ設けている。

入学者選抜方法

武蔵野学院大学大学院では国際感覚を持ち、国際的舞台や大学、研究機関等で研究者として活躍しうる学生の受け入れを図るべく、多様な入学者選抜方法を設ける。上記の「求める人材像」を踏まえ、教育目標達成にそって各選抜方法では以下の点を評価する。

学内進学者選抜

本学の国際コミュニケーション学部において、教育目標を十分理解し、明確な目的意識をもって大学生活を送り、「国際コミュニケーション」に関する専門的知見を高めてきたかを評価する。知識基盤社会を支え、高度な職業的舞台で展開していくスキルと知識素養を備えるという実践的観点から、将来、研究に従事でき、高度な実務を担える人材で、修士論文をまとめることができる人材を求める試験。面接及び書類審査を課す。

一般選抜

本専攻の教育目標を十分理解し、明確な目的をもって研究生生活を送ることができるかを評価する。加えて、その基盤となる力としての英語力を確認する。知識基盤社会を支え、高度な職業的舞台で展開していくスキルと知識素養を備えるという実践的観点から、研究に従事でき、高度な実務を担える人材で、修士論文をまとめることができる人材を求める試験。英語、小論文、面接及び書類審査を課す。

社会人入試

社会人として培った経験、その経験から得たコミュニケーションの力や積極的に物事を理解しようとする意欲、明確な問題意識をもって研究生生活を送ることができるかなどを評価する。知識基盤社会を支え、高度な職業的舞台で展開していくスキルと知識素養を備えるという実践的観点から、研究に従事でき、かつ、社会人としての経験を生かし、修了後は問題意識をもって国際社会や地域社会に貢献でき、修士論文をまとめることができる人材を求める試験。小論文、面接及び書類審査を課す。

外国人留学生入試

異なる言語・教育・政治・文化のもとに育った日本語能力の高い外国人留学生を院生として入学させ、修了後は、国際化の進む我が国と出身国との前向きな交流に貢献でき、かつ我が大学の伝統を受け継げる人材を確保する。このため、高度な日本語能力を有し、本学の大学院教育目標を認識し、将来の自分の専門に関して強い目的意識と勉学意識を有し、日々の研究活動に耐え、修士論文をまとめることができる人材を求める試験。小論文及び面接を課す。

4-2 アドミッション・ポリシー（国際コミュニケーション専攻博士後期課程）

本学では入学試験形態によりアドミッションポリシーをそれぞれ設けている。

学内進学者選抜

本大学院、博士前期課程の国際コミュニケーション専攻において、教育・研究を十分理解し、明確な目的意識をもって大学院生活を送り、「国際コミュニケーション」に関する専門的知見を高めてきたかを評価する。知識基盤社会を支え、高度な職業的舞台で展開していくスキルと高度な学識を備えるという実践的観点から、研究に従事でき、博士論文をまとめることができる者を求める試験である。

一般入試

本専攻の教育・研究目標を十分理解し、明確な目的をもって研究生生活を送ることができ

るかを評価する。加えて、その基盤となる力としての語学力を確認します。知識基盤社会を支え、高度な職業的舞台で展開していくスキルと高度な学識を備えるという実践的観点から、研究者として自立でき、博士論文をまとめることができる者を求める試験である。

社会人入試

社会人として培った経験、その経験から得たコミュニケーションの力や積極的に物事を理解しようとする意欲、明確な問題意識をもって研究生活を送ることができるかなどを評価する。知識基盤社会を支え、高度な職業的舞台で展開していくスキルと高度な学識を備えるという実践的観点から、研究に従事でき、かつ、社会人としての経験を生かし、研究者として自立でき、博士論文をまとめることができる者を求める試験である。

外国人留学生入試

異なる言語・教育・政治・文化のもとに育った日本語能力の高い外国人留学生を院生として入学させ、修了後は、国際化の進む我が国と出身国との前向きな交流に貢献でき、かつ我が大学の伝統を受け継げる人材を確保する。このため、高度な日本語能力を有し、本学の大学院教育・研究目標を認識し、将来の自分の専門に関して強い目的意識と研究意識を有し、日々の研究活動に耐え、研究者として自立でき、博士論文をまとめることができる者を求める試験である。

5 カリキュラム・ポリシー

5-1 カリキュラム・ポリシー（国際コミュニケーション専攻博士前期課程）

- 1 知識基盤社会を支える高度なコミュニケーション・スキルを備え、我が国及び国際社会の発展と文化の進展に寄与し、専門性を構築できる人材養成を目指し、言語・コミュニケーション科目、日本文化・社会、国際文化・社会科目を配置する。
- 2 言語・コミュニケーション科目では英語・中国語又は日本語によるコミュニケーション能力を国際社会で通用するレベルまで引き上げ、日本を基盤に置いた国際コミュニケーションを具体化するために、中国語においては日中比較言語の視点よりコミュニケーション能力を高める科目を配置する。
- 3 日本文化・社会科目では日本を起点にして「自己と他者」、「共通性と共感」を意識し、国際的な視点から見た日本文化・社会について問題意識と研究課題を持って研究に邁進するための科目を配置する。
- 4 国際文化・社会科目では日本・米国・中国を中心にして、「自己と他者」、「共通性と共感」といった国際コミュニケーションに関する問題意識と研究課題を持って研究に邁進するための科目を配置する。
- 5 しっかりとした勤労観、職業観を持ち、研究者としての姿勢を身に付け、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人・研究者として自立していくことができるようにするため研究指導（発表指導・研究倫理を含む）を位置付けた。
- 6 これまで身につけた知識基盤社会を支える高度なコミュニケーション・スキル及び専

門性の深い見識を統合し、院生全員に対して最終的には修士論文として結実できるよう、研究指導教員により細かな研究指導を行う。研究指導は必修として位置づけ、研究者としての姿勢や社会人として自立できるような人間教育を兼ねる。

5-2 カリキュラム・ポリシー（国際コミュニケーション専攻博士後期課程）

- 1 実践的で高度なコミュニケーションの研究に重点を置き、日中英語圏の文化や言語、日中英語圏関係の深い理解を目指す人材を養成するため、コミュニケーション関連研究科目、言語研究科目、文化研究科目を配置する。
- 2 コミュニケーション関連研究科目では、国際関係の歴史的背景や国際的視座が求められ、顕著にコミュニケーションの影響を受けるビジネスにおけるつながりも含めて、多面的で広範な国際コミュニケーションの諸相について、理論的に見識や研究が深められる科目を配置する。
- 3 言語研究科目では、高次元のコミュニケーションを可能にすることを前提とした日本語・中国語・英語の変遷について歴史的経緯を十分踏まえたうえで意思伝達機能を究明する科目を配置する。
- 4 文化研究科目では、コミュニケーションの底流にある文化に関する高度な素養と深い洞察力を涵養する日本文化、中国文化、英語圏文化に関連する科目を配置する。
- 5 勤労観、職業観、研究者としての姿勢を身に付け、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人・研究者として自立していくことができるようにするものとして研究指導はキャリア教育を担うものと位置付けた。
- 6 カリキュラム・ポリシーをさらに具現化するため、履修系統図として、日中研究、日英語圏研究、日中英語圏研究の3つを想定した。
- 7 これまで身につけた実践的で高度な国際コミュニケーションの研究に重点を置き、日中英語圏の文化や言語、国際関係の深い理解と見識を統合し、院生が最終的に博士論文として結実できるよう、研究指導教授により細やかな研究指導を行う。

6 ディプロマ・ポリシー

6-1 ディプロマ・ポリシー（国際コミュニケーション専攻博士前期課程）

- 1 国際コミュニケーションの知識と理論
多様化・複雑化する国際コミュニケーションの理論を中心に、専門性の高い見識を深め、高度な学識を身に付けた人材。
- 2 研究者としての汎用的技能
カリキュラムの多面的履修を通して、知識基盤社会を支える高度のコミュニケーション・スキルとして語学、その背景にあるコミュニケーション理論を備え、研究者として問題を解決に導く姿勢を身に付けた人材。
- 3 研究者としての態度・志向性
建学の精神「他者理解」に基づき、研究倫理を遵守し、研究者として研究計画・研究

発表・研究報告・論文執筆に真摯に取り組む姿勢を身に付けた人材。

4 総合的な研究経験を通しての創造性と独自性

2年間にわたる「講義」「演習」を通して身に付けた専門的な知識を基に、研究指導を十分に受け、国際コミュニケーションの視点からの研究をまとめた修士論文が、知識の活用能力、批判的・論理的思考力、問題解決力、表現能力、コミュニケーション能力などを統合し、これまでの先行研究を踏まえ、十分な実証が行われ、確かな見識を身に付けた人材。

6-2 ディプロマ・ポリシー（国際コミュニケーション専攻博士後期課程）

- 1 カリキュラムの多面的履修を通して、国際コミュニケーションの視点から日中英語圏に関する問題意識を高め、日中英米関係に深い理解と高い見識を備えている。
- 2 日中英語圏関係、日中英語圏比較文化、日中英語といった日中英語圏コミュニケーションの基盤となる分野に関する理解を深める一方、歴史的背景を踏まえると共に時代の流れを意識しながら良好な日中関係を築けるよう確かな見識を身につけている。
- 3 研究について、研究計画、研究発表、研究報告など、その進捗状況を示し、研究が研究指導の下に進められている。
- 4 3年間にわたる履修及び研究指導を通して身に付けた専門的な知識を基に、日中英語圏コミュニケーションの視点からの研究を博士論文としてまとめている。
- 5 博士論文はこれまでの先行研究を踏まえ、十分な実証が行われ、確かな見識が認められる。

7 学位論文に係る評価の基準

修士論文に係る評価基準

- (1) 修士の学位を受ける者は本学の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）が求める学力、能力、資質を満たしていること。
- (2) 論文は体系的に書かれ、論題と内容は整合性、章立て等は論文を構成する上で適切であり、問題提起（仮説）と結論の整合性がとれ、論文として体裁を整えていること。
- (3) 先行研究が検討され、先行研究と修士論文の主張の関係が明示されていること。
- (4) 研究倫理、学問的なモラルが守られていること。

博士論文に係る評価の基準

- (1) 博士の学位を受ける者は本学の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）が求める学力、能力、資質を満たしていること。
- (2) 論文は体系的に書かれ、論題と内容は整合性、章立て等は論文を構成する上で適切であり、問題提起（仮説）と結論の整合性がとれ、論文として体裁を整えていること。
- (3) 先行研究が十分に検討され、先行研究と博士論文の主張の関係が明示され、申請する博士論文の特徴が明確化されていること。
- (4) 研究倫理、学問的なモラルが守られていること

8 学習から研究へ（博士前期課程への進学）

一般に高等学校までは学習「まなびおさめること。勉強すること。」（『大辞林』第三版の解説）と呼ばれ、大学・大学院では研究「物事について深く考えたり調べたりして真理を明らかにすること」（『大辞林』第三版の解説）が中心に行われるようになる。これは学校ごとにその教育の達成目標が異なるからである。学校教育法には次のように定義されている。

第五十一条 高等学校における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 一 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。
- 二 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。
- 三 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。

第八十三条 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

- 2 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

第九十九条 大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の発展に寄与することを目的とする。

- 2 大学院のうち、学術の理論及び応用を教授研究し、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とするものは、専門職大学院とする。

大学院は「学術の理論及び応用を教授研究」することが求められるため、当然のことながら、大学ではこれに必要な基礎知識を備えておくことが必要である。従って、大学の学びを全くしていない分野について大学院の博士前期課程で研究しようというのは無理のあることである。大学院では学術論文や専門書を読むことが求められるため、こうした文献を読むことができる素養が備わっていなければ、2年間（3年間）で修士論文（博士論文）を書くことはできないだろう。単に「好きだから」「興味があるから」といった単純な思い付きのような志望動機では現実的に2年後（3年後）に修士論文（博士論文）を書くことはかなり困難なことである。

また、本学大学院は「国際コミュニケーション研究科国際コミュニケーション専攻」ということから、「国際コミュニケーション」に全く関連しない分野についての研究は大学院

の目的とは整合性がないため、厳しい判断が行われることがある。研究しようと思う分野がどのような観点から「国際コミュニケーション」と関連があるのかを説明できるかは根本的な問題である。本学の考える「国際コミュニケーション」は文学あるいは人文学の分野を中心としているため、言語や文化は核となる部分である。また、あまりにもテーマが大きすぎるのも研究テーマとしてはふさわしくない。以下を参考にして、自身の考えをまとめるとよいだろう。

研究テーマ：国際コミュニケーションとの整合性

- 1 日本人 日本語の文法事項について進める研究。×
- 2 日本人 日本語の文法事項について多言語との比較を行いながら、日本語の特徴を明らかにしようとする研究。○
- 3 日本人 日本語の敬意表現の歴史的変遷を意識して進める研究。×
- 4 日本人 日本語の敬意表現について多言語との比較を行いながら、日本語の特徴を明らかにしようとする研究。○
- 5 日本人 第二外国語として外国人に日本語を教授するための日本語教授法に関する研究。◎
- 6 留学生 日本語の文法事項について進める研究。△
- 7 留学生 日本語の文法事項について、外国人が第二外国語として日本語を習得する上での留意点を含め、第二言語習得理論に関する研究。◎
- 8 留学生 第二言語として日本語を教授する場合の日本語教授に関する研究。◎
- 9 日本人 和食文化についての研究。×
- 10 日本人 海外の食文化が和食に与えた影響を研究。○
- 11 日本人 クール・ジャパンの研究。△
- 12 日本人 日本のポップカルチャーが海外に与えた影響に関する研究。○
- 13 留学生 日本のポップカルチャーの研究。△
- 14 留学生 日本のポップカルチャーが海外で受け入れられている状況の研究。○
- 15 日本人 自動車産業の研究。×
- 16 日本人 日本の自動車産業の海外戦略に関する研究。△
- 17 日本人 トヨタの海外戦略の研究。○

日本人が日本に関する研究を行う場合には、そこに「国際」の意味合いがどのように反映されているかが大きなポイントになる。「世界の中の日本」をどう意識しているか、また、単に並列して比較しても国際コミュニケーションにはならないため、その影響関係等にまで踏み込むことが必要である。

×印のものは研究テーマの文言からは国際コミュニケーションとどう関連しているのかを判断することができない。このような場合には研究計画の中で具体的に国際コミュニケーションの要素があることを触れる必要がある。以下はその事例である。

「1 日本語の文法事項について進める研究」

→ 他の言語の比較、影響関係等に触れ、世界の言語の中の一つとしての日本語の位置付け、言語学的な視野や外来語等の影響に触れるなど日本語だけに特化しないことが求められる。

「3 日本語の敬意表現の歴史の変遷を意識して進める研究」

→ 上記と同様の視点が必要。また、海外における日本語教育での敬意表現の取り扱いについて研究するのもよい。このような場合には研究テーマの題目に工夫すること。

「9 和食文化についての研究」

→ 単に和食だけを論じても国際コミュニケーションにはならないため、海外における和食文化の普及、外国人から見た和食、和食における洋食の影響など視野を広げること。

「15 自動車産業の研究」

→ 研究テーマの題目自体があまりにも大きく曖昧であり、国際コミュニケーションとどう関連するのか、不明確なため、題目を工夫することがまず重要。次に計画の中に単に日本国内の自動車産業だけ触れても国際コミュニケーションにはならないため、視点を海外にも置き、「国際」の取り扱いに注意すること。

留学生在が日本に関する研究を行う場合には、外国人としての視点を十分に活用することが求められる。単に「中国人である私は、、、」のような個人的な感性だけで研究テーマを設定すると、実際に研究や修士論文を進めていくと限界が出てくる。研究で求められるものは客観性である。研究テーマの設定では個人の感性がひとつの理由となる場合もあるが、論文を進める上で、客観性がなければ説得力のない、また、単なる思い付きの内容となります。この意味ではどのように実証していくかが大きな鍵となる。このため、「私」ではなく、「中国人は、、、」「外国人は、、、」といった視点で物事を考察し、さらに他の研究者の先行研究によりこれを実証していくことが必要となる。博士前期課程は2年間しかなく、実際に論文を提出するまでには20ヶ月しかない。2年間とは修了の期間であり、修士論文の提出は入学してから1年と8ヶ月後となることを十分に考慮しなければならない。

博士後期課程は博士論文は3年間（在学延長はさらに3年間）で審査終了となるようにするために、入学後、実質的には2年と8ヶ月後には博士論文の提出となるため、計画性のある研究に取り組む必要がある。

9 大学から大学院（博士前期課程）へ

大学院博士前期課程は 2 年間で修士の学位の取得することになるため、最初の 1 年目が大きな鍵を握っている。従って、大学からの研究の継続性は重要である。面接試験等でもここはかなり重要であるため、継続性あるいは関連性を具体的に説明できるかがまず必要である。そのため受験を考える、あるいは実際に志願する際にはどのようなことを研究するのか、その研究テーマを定め、研究計画を立案することは入学試験における合否にも大きく影響する。以下の事例をまず参考にしてもらいたい。事例は留学生をメインとした。日本語能力検定試験が N 1 相当であることは当然のことである。

事例 1 一貫性のある方向性

大学

日本語学部・学科あるいは日本語に関係する学部・学科で学び、日本語や日本文学について学んできた。日本語能力検定試験等で N 1 相当に合格している。

大学院

日本語学習の中で尊敬語、丁寧語、謙譲語などで苦労したため、さらに日本語をブラッシュアップするためにさらに日本語を研究する。修了後は観光業界での進路を考えている。例えばホテルなどでの接客を担当したい。

- ◎大学から大学院への研究の方向性に一貫性がある。
- ◎国際コミュニケーションにふさわしい研究内容である。
- ◎修了後の進路も明確。

事例 2 ある程度一貫性のある方向性

大学

外国語学部・学科あるいは外国語に関係する学部・学科で学び、英語や日本語や英米文学や日本文学について学んできた。日本語能力検定試験等で N 1 相当、TOEIC600 点以上である。

大学院

日本と中国における英語教育の比較研究を行う。修了後も博士後期課程の進学も考えているが、現在未定。

- 大学から大学院への研究の方向性に一貫性がある。日本語と英語が堪能であっても、英語教育について研究するのであれば、中国と日本の学校教育制度などについても十分な見識が必要である。このため、こうした教育制度に関する知識がなければこの研究テーマはふさわしくない。大学時代の基礎が重要である。
- ◎国際コミュニケーションにふさわしい研究内容である。
- 修了後の進路は曖昧であるが、合否に影響はない。

事例 3 一貫性のある方向性

大学

国際貿易学部・学科あるいは国際貿易に関係する学部・学科で学び、経済や経営のことを学ぶ傍ら、日本語能力検定試験等でN 1相当である。

大学院

日本語から中国語に入った借用語について、特に経済や経営用語を中心にまとめ、言語を通じた日中関係に取り組む研究。修了後は日本での就職を希望。

◎大学から大学院への研究の方向性に一貫性がある。貿易と日本語という2つの柱がそれぞれ生かされた研究テーマ。

◎国際コミュニケーションにふさわしい研究内容である。

◎修了後の進路も現在は予定として、大きな問題はない。

事例4 ある程度一貫性のある方向性

大学

国際貿易学部・学科あるいは国際貿易に関係する学部・学科で学び、経済や経営のことを学ぶ傍ら、日本語能力検定試験等でN 1相当である。

大学院

日中の貿易について研究したい。修了後は日中の貿易に関わる仕事に就きたい。

○大学から大学院への研究の方向性に一貫性がある。「日中の貿易」ではあまりにも広すぎるため、具体的に業種を絞るか、あるいは会社などを特定することが必要。また、ある程度資料が入手可能であるかどうかを事前に調べておく必要がある。もし、資料がない場合には研究ができなくなり、修士論文が書けなくなる恐れもある。

◎国際コミュニケーションにふさわしい研究内容である。

◎修了後の進路も明確。

事例5 一貫性が余りみとめられない方向性

大学

外国語学部・学科あるいは外国語に関係する学部・学科で学び、英語や日本語や英米文学や日本文学について学んできた。日本語能力検定試験等でN 1相当、TOEIC600点以上である。

大学院

日本企業の経営理念を学び、将来の起業に備えるため。

×大学から大学院への研究の方向性に一貫性が認められない。大学での履修科目において、経営関係をかかなり修得している場合には大きな問題とならないが、1、2科目程度学んだだけで大学院において日本企業の経営理念を学ぶことは大学院レベルではない。また、企業理念は企業ごとに異なるため、具体性に欠ける。

○国際コミュニケーションにふさわしい研究内容である。本大学院は文学・人文学分野であるため、文化との関連性についてはどのように考えるのかもやや不明。

○修了後の進路は不明確であるが、合否に影響はない。

事例6 一貫性が余り認められない方向性

大学

国際貿易学部・学科あるいは国際貿易に関係する学部・学科で学び、経済や経営のことを学ぶ傍ら、日本語能力検定試験等でN1相当である。

大学院

中国のアニメ産業について研究したい。修了後は中国に帰国し、その後就職活動をする予定。

△大学から大学院への研究の方向性にやや一貫性に欠ける。経営としてアニメ産業のことについて大学で研究していれば大きな問題はない。単にアニメや漫画が好きだからこのテーマを設定するのはあまりにも基礎知識不足となる。面接時においてかなり細かなことを聞かれることになるが、その時に自身での理解がかなり高いこと、具体的な資料なども説明などができければ、方向性ありとして判断できる。

△国際コミュニケーションに関する研究であることを全体的にアピールが必要である。但し、日本のアニメ産業の影響などを含み、資料として入手できる見込みがあれば、ある程度整合性が出て来る。留学生が母国のみのことを扱えば、国際コミュニケーションではなくなる。

○修了後の進路は不明確であるが、合否に影響はない。

大学で学んでいない分野を研究テーマにすることは一貫性の観点からみてもかなり厳しい判断をされることがある。大学との一貫性が余り認められない場合には、研究計画書をかなり綿密に立案し、具体的な内容を記載することが必要。さらに、面接でも細かな内容を聞かれることになるので、自身ですでに研究を行っていることがアピールできなければ、厳しく判断されることになる。

大学院の受験では3つが大きなポイントがある。第1は日本語で修士論文が書けるのかどうか。(留学生の場合)第2に研究テーマが国際コミュニケーション研究科にふさわしいかどうか。第3に単なる思い付きではなく、論証可能な研究テーマであるかどうか。受験時の願書と共に提出される研究計画と面接が重要となる。

10 研究計画書（博士前期課程 受験時）

10-1 入学志願理由（留学生の場合）

- 1 どうして大学院に進学するのか。
- 2 何故留学することを考えたのか。
- 3 留学先が日本で、本大学院を志望するのは何故か。

10-2 入学志願理由（日本人の場合）

- 1 どうして大学院に進学するのか。
- 2 何故、本大学院を志望するのは何故か。

留学生の場合には上記の3点、日本人の場合には上記の2点を記入することが望ましい。

11 研究計画書（博士後期課程 受験時）

11-1 入学志願理由（留学生の場合）

- 1 どうして博士後期課程に進学するのか。
- 2 何故留学することを考えたのか。
- 3 留学先が日本で、本大学院の博士後期課程を志望するのは何故か。
- 4 修了後は何を目標しているのか。

11-2 入学志願理由（日本人の場合）

- 1 どうして博士後期課程に進学するのか。
- 2 何故、本大学院の博士後期課程を志望するのは何故か。
- 3 修了後は何を目標しているのか。

留学生の場合には上記の4点、日本人の場合には上記の3点を記入することが望ましい。

12 研究計画書と受験における面接

大学院は与えられた内容を学習するのではなく、自ら設定した研究テーマを極めて行くことになるため、研究テーマが重要である。研究テーマ、研究計画は入学願書と共に提出することになり、必ず面接等でも確認することになる。従って、単なる思い付きではなく、自分自身である程度のイメージを固め、具体性が問われる。研究計画書ではすでに読んでいる研究書等の先行研究として紹介することが望ましい。分野によっては必読書もあり、これに関連したことを全く知らないということがないようにしてもらいたい。また、研究計画書で自身が使った専門用語は面接で説明を問われた場合には、自身で説明ができるようにすること。「グローバリゼーション」「グローカリゼーション」「帝国主義」「文化帝国主義」等を研究計画書で書けば、当然、この用語を自身の言葉で説明できるようにすること。

研究計画書に記載する内容に、研究書等からの引用がある場合には、必ず引用であることを明記すること。これがない場合には論文と同様に盗用となる。インターネットからそのまま文章を記載した場合にも同様の扱いとなる。研究倫理に反する不正行為となる。出典等を明示すること。研究倫理の意識を高めることは、研究者の心得でもある。

留学生の場合には日本語能力の判断材料ともなる。日本語能力検定1級(N1)を取得していても、論文を書く能力がなければ、研究者となることはできない。当然のことであるが、面接での応答は同じ判断となる。

博士後期課程の受験者には修士論文の内容や修士論文と博士後期課程での研究計画との関連性について説明を求められることがあるので、説明できるようにすること。特に同一線上ではなく、方向性が変わる場合や全く異なる分野となった場合にはその必然性とはたして3年間で論文をまとめることができるのかどうかの見通しについても自身の考えをまとめておくこと。研究に対する姿勢なども重要である。

13 合格後から入学前までの入学前指導

合格が決まり入学手続きが済んだ段階で、入学前指導として研究計画の確認を行う。受験時に提出している研究計画を再度確認し、受験時での面接で受けた指摘などを踏まえて、さらなる内容の充実を図る意味でも研究計画書M様式0号(博士前期課程)、研究計画書D様式0号(博士後期課程)の提出を求めている。研究内容がかなり絞られている場合にも、自身での確認を行うことと、受験時から提出までの間に得た新たな知見や参考にした研究文献等なども積極的に記載するように努めること。

研究計画書M又はD様式0号の記載がかなり曖昧な場合には再度提出を求めることがある。この研究計画書M又はD様式0号に基づき、入学後に希望指導教員との面談を行うため、基礎資料として極めて重要となる。受験時に提出した研究計画書と入学前指導における研究計画において大きな変更があった場合には、希望する研究指導教員が担当できない、あるいは2年間での修了が困難になることがある。

14 入学後の研究について（博士前期課程・博士後期課程 受験時）

1 希望する指導教員名について

大学院で最も重要なことは修士論文、博士論文を完成させることになる。このため、論文の指導に当たる教員は重要な役割を果たす。可能であれば、受験を考えた段階で希望する指導教員に打診し、相談することが望ましい。（遠方の場合にはメールなどを活用するのもよい）

- (1) 武蔵野学院大学又は武蔵野学院大学大学院の学生が受験を希望する場合には直接研究室を訪問などし、事前に相談すること。直接訪問することが難しい場合にはゼミの担当教員より紹介してもらうこと。何の相談もなく、受験を迎えた場合には、指導している学生の人数の関係から指導教員が引き受けない場合もある。留学生の場合には国際センターに相談してもよい。留学生の卒業生も同様である。
- (2) 武蔵野学院大学、武蔵野学院大学大学院の学生以外の場合には、できるだけ受験を希望する場合には直接研究室を訪問や電話、メールなどにより事前に相談することが望ましい。特に博士後期課程を受験する場合には事前相談はかなり重要となる。博士の学位はそれだけ慎重に進める必要があるため。
- (3) 希望する研究指導教員の業績などを本学のHPやCINII、その他のインターネットなどで調べ、自身の研究との整合性などを確認すること。全く異なる分野の研究指導を希望しても教員が指導できないため、引き受けないことがある。これは研究が高度になればなるほど専門性が求められるためである。
- (4) 希望する研究指導教員がはっきりわからない場合には、第一希望、第二希望は空欄にしもよい。大学側が最も分野に近い教員を推薦する。大学は最も研究内容に近い専門分野の教員を検討する。
- (5) 希望する研究指導教員に、すでに指導学生が多くいる場合には、指導を引き受けられない場合がある。

2 研究テーマ

博士前期課程の場合

- ・あまり大きなテーマとせず、できるだけ絞るようにすること。

悪い例 日本文化について、日中比較文化について、日本企業に関する研究

日本文化について：これではあまりにも範囲が広すぎるため、もっと具体的なテーマを設定すること。「日本の食文化について」としても、これでもまだ曖昧すぎる。食文化の範囲をさらに絞ること。「寿司に関する一考察」はかなり範囲も絞っているが、握り寿司、押し寿司、巻き寿司、回転寿司などがあり、これらすべてを扱うことは単なるレポートになってしまうため、例えば回転寿司だけに絞るようなポイントを明確にする方がよい。

日中比較文化について：これではあまりにも範囲が広すぎるため、もっと具体的なテーマに絞ること。「挨拶にみる日中比較」としてもこれでもまだ広過ぎる。挨拶の場面をもっと具体的に絞り込み、考察を深めることが必要。

博士後期課程の場合

- ・博士論文に直結するような研究テーマを設定すること。曖昧なものせず、具体性のあるものとする。修士論文からの継続性のあるもの、修士論文をさらに絞り込んだテーマ、修士論文で扱わなかったが、周辺事項として関連性のあるもの。
- ・修士論文と全く違ったテーマを設定する場合には研究計画概要（問題意識を含む）の部分を充実させること。面接においてもかなり細かなところを質問することとなる。

3 研究計画概要（問題意識を含む）

博士前期課程の場合（留学生の場合）

- ・日本で研究することの意味が重要となる。母国ではなく、どうしてその研究を日本で取り組むかが重要となる。単に興味関心があるという理由では修士論文を書くまでには至らないため、日本での先行研究に触れるなど、ある程度の文献を抑えていることが重要である。
- ・研究テーマを設定した理由などにも触れること。
- ・その研究を行うことによってどのような結果が見いだせるのかにも触れること。よくない事例として「〇〇の日中比較研究」というテーマを設定した場合に、比較することで終わってしまうことがある。比較するだけでは論文として不十分であるため、「比較してどのような分析をするのか」といったことまで、仮説でもよいので、自分なりの研究の全体像を示すこと。

博士前期課程の場合（日本人の場合）

- ・研究を進めにあたり、中心となる文献としてどのようなものかを具体的に記載することが望ましい。
- ・研究テーマを設定した理由などにも触れること。
- ・その研究を行うことによってどのような結果が見いだせるのかにも触れること。よくない事例として「〇〇の日中比較研究」というテーマを設定した場合に、比較することで終わってしまうことがある。比較するだけでは論文として不十分であるため、「比較してどのような分析をするのか」といったことまで、仮説でもよいので、自分なりの研究の全体像を示すこと。

博士後期課程の場合（留学生の場合）

- ・日本でその研究を進める意味は何か。どうしてなのかにも触れること。
- ・研究テーマを設定した理由及び研究のオリジナリティ（独自性）は何なのかにも触れること。先行研究を単にまとめるだけでは修士論文のレベルである。先行研究のまとめ方、整理の仕方にオリジナリティがあれば、これは新しいアプローチとして認められる。

博士後期課程の場合（日本人の場合）

- ・先行研究としてこれまでどのようなものがあり、これから取り組もうとする研究との関連性について触れること。

- ・研究テーマを設定した理由及び研究のオリジナリティ（独自性）は何なのかに触れること。先行研究を単にまとめるだけでは修士論文のレベルである。先行研究のまとめ方、整理の仕方にオリジナリティがあれば、これは新しいアプローチとして認められる。

4 大学・博士前期課程での研究状況

4-1 博士前期課程の場合（大学での演習科目名、卒業論文）

入学後の研究との整合性をある程度ここで判断するので重要である。基礎的なものがないまま、修士論文を書き上げることはできない。また、入学後の研究テーマと整合性があまりない場合には面接等でも質問するので、説明できるようこと。

①大学で卒業論文の制度がある場合には卒業論文のテーマ及び概要を記載すること。概要は文章としてわかりやすくまとめること。理想的な書き方としては章立てを記載し、そのあとに文章で概要を記載すること。卒業論文をまとめた言語についても記載して下さい。中国語、日本語、英語なのか。

②卒業論文の制度がない場合にはゼミ論文を記載する。上記に準じる。

③卒業論文やゼミ論文などの制度がない場合には特に興味関心のあるテーマや概要を記すること。③の場合には相当しっかりしたものを記載すること。できれば、どのような書籍を読んだのかも重要である。本自体をまったく読まない人は大学院での研究には耐えられないので、進路自体について再考すること。

4-2 博士後期課程の場合（修士論文及び特定課題）

① 博士前期課程（修士課程）での修士論文又は特定課題についてテーマ及び概要を記載すること。修士論文なのか特定課題なのかも明記すること。概要は文章としてわかりやすくまとめること。理想的な書き方としては章立てを記載し、そのあとに文章で概要を記載すること。修士論文又は特定課題をまとめた言語についても記載して下さい。中国語、日本語、英語なのか。場合により修士論文及び特定課題の提出を求めることがある。

② 博士前期課程を飛び越して博士後期課程を受験される場合には修士論文及び特定課題を提出していないため、入学後の研究に特に関連のある研究業績、活字化しているもの、あるいはこれまでに口頭発表した内容を記載すること。このような場合には本大学院の受験資格審査を事前に受けることになっている。

5 研究計画書

上記の「2 研究テーマ」「3 研究計画概要（問題意識を含む）」と一致していること。研究テーマが異なることはありえないので、特に注意すること。研究計画書は書類審査上、大きな比重を占めるため、内容はもちろんのこと、誤字脱字、表現等、研究者として見識のある文章とすること。この部分は特に研究倫理が問われるため、他の研究者の論文等の盗用、捏造、改ざんなどは絶対にしないこと。引用の場合には必ず出典を明らかにするな

ど、研究者としての資質が問われる。パソコン等により作成することは認められているが、分量についてはA 4表裏1枚となっているため厳守すること。

「1 その研究の意義」「2 入学直後の取り組みについて」「3 現在考えている研究計画」について記載すること。「3 研究計画概要（問題意識を含む）」の内容をさらに具体的に記載することになるため、内容が一致していること。希望する指導教員と受験時に相談する際にはこの部分を明確にしておくことが重要なため、自身である程度まとめ、希望する指導教員にアドバイスを受けることは差し支えない。

「1 その研究の意義」についてはなぜ、その研究に取り組むのか、その研究によりどのような知見や成果が得られるのかを記載すること。

「2 入学直後の取り組みについて」は博士前期課程については2年間、博士後期課程については3年間の取り組みについて記載すること。学年毎、学年前期・後期毎に記載してもよい。この時に注意すべき点はフィールドワークとアンケート調査である。フィールドワークとアンケート調査が出来なかった場合には論文が完成しないことになるため、代替案は必ず記載すること。アンケート調査を実施する場合には基準等もあるため、安易に実際しないこと。確実にできることが前提である。相応しくない例として企業等に社員の意識調査をするといった場合に、企業等で許可が出るとは考えにくい。また、〇〇大学で〇〇のアンケート調査をするといった場合も同様である。フィールドワークは国際情勢に大きく左右されない地域を選択すること。フィールドワークとアンケート調査をメインにする研究ははっきりそれが実現できる目途があって初めて修士論文及び博士論文が成立するため、推奨しない。

「3 現在考えている研究計画」は特に重視する。博士前期課程については2年間、博士後期課程については3年間の取り組みについて記載すること。学年毎、学年前期・後期毎に記載してもよい。

どのような研究も先行研究を無視して進めることはできないため、先行研究をどう取り扱うのかを必ず記載すること。また、核となる先行研究が想定されている場合には明記すること。

博士前期課程受験の場合には先行研究に頼る比重が高くなるため、先行研究を重視すること。博士後期課程受験の場合には先行研究＋オリジナリティ（独自性）が求められるため、特にオリジナリティ（独自性）について説明すること。

オリジナリティ（独自性）は突飛なもの、全く新しいものという意味ではない。これまでの先行研究の捉え方の修正、先行研究を整理した上で問題の整理、先行研究を整理した上での不足分野への指摘、先行研究を整理した上で新しい視点からの補足、研究対象への新しいアプローチ方法、全く新しい知見の提唱などがある。自分自身が取り組む研究の方向性がどのような点でオリジナリティ（独自性）があるのかを明確に記載すること。

15 入学後の研究計画書

入学後、約 1 月半後に研究計画書を提出することになる。入学後に希望する研究指導教員との面談を行い、まず研究指導教員の決定が研究科委員会で行われる。

院生は研究指導の授業やオフィス・アワーを通して研究計画書の立案を行う。入学後は研究指導教員と相談を行うことが重要で、具体的な内容とすることが求められる。安易に「〇〇の研究」とせず、できるだけ研究テーマを見ただけで、その研究の方向性がわかるようなタイトルを考えること。入学後は『履修の手引き&修士論文に関する要項』、『履修の手引き&博士論文に関する要項』をよく読み、提出期限厳守で対応すること。『履修の手引き&修士論文に関する要項』、『履修の手引き&博士論文に関する要項』には書類一式の書式が掲載されている。また、本大学院HPにも掲載されている。

入学許可された段階で希望する指導教員と可能であれば、連絡を取り、研究計画について具体的に進めていくことをお勧めする。受験時の面接等で内容があいまいな場合には入学許可後にあらためて研究計画書の提出を求めることがある。

16 受験時提出書類 見本

サンプル1 (博士前期課程 留学生)

入学志望理由			
<p>大学では日本語学科で日本語を中心に勉強してきましたが、さらに日常生活の中で日本語をブラッシュ・アップしたい。その為に日本への留学を希望し、〇〇大学が武蔵野学院大学と提携している（交流している）ことから△△大学の〇〇先生に相談や説明を聞き、さらに先輩からも貴学の様子を聞き、受験したいと考えました。（→ 大学での学びとの継続性、本学を知った経緯等にふれることが重要です）</p>			
入学後の研究について 希望する研究	希望する研究指導 教員	第 一 希 望	第 二 希 望
研究テーマ：外国人からみた日本語の敬意表現			
<p>研究計画概要（問題意識も含む）：</p> <p>中国での日本語学習で最も難しいと感じたものは日本語の尊敬語、丁寧語と言った敬意表現です。中国語には日本語ほど敬意表現が複雑なものがなく、この習得が最も困難でした。この敬意表現が使い熟せることで、日本人とのコミュニケーションが円滑に行えるのではないかと考え、日本語の敬意表現についてどのような種類があり、日本人は本当にこれらをすべて完全に使い熟しているのか、また、インターネットのメールなどの登場により、敬意表現等に何か変化が生じているのか研究したい。</p> <p>これまで日本語学習として日本語の教科書や日本語能力検定といった実際に使用する日本語表現関係の本しか読んでいないため、日本語の敬意表現に関する研究書を読み、また、指導教員の指導を受け、日本語の敬意表現について研究したい。また、外国人として日本語の敬意表現についてどのような受けとめ方をしているのかも視点に加えたい。</p>			

サンプル2 (博士前期課程 留学生)

入学志望理由			
<p>大学では国際貿易学科でしたが、日本に興味・関心があり、日本語の学習にも力を入れてきました。N2には合格していますが、N1まであと数点というところです。日本語をブラッシュ・アップしたい。その為に日本への留学を希望し、留学について△△大学の〇〇先生に相談したところ、武蔵野学院大学のことを聞き、相談や説明を聞き、受験したいと考えました。日本と中国の貿易に関する研究をし、修了後には起業したいと考えています。</p>			
入学後の研究について 希望する研究	希望する研究指導 教員	第 一 希 望	第 二 希 望
研究テーマ：日中間のビジネスコミュニケーションについて			

研究計画概要（問題意識も含む）：

外国とのビジネスを円滑に進めるためには、それぞれの異文化理解が必要でないかと考えています。日本人のビジネスの進め方と中国人のビジネスの進め方の違いをまず調査・研究し、相違点を明らかにしたい。ビジネス習慣の違い、言語の違いによるトラブルなどが想定されるが、その根本が何なのかを探っていきたい。

2年間という短い期間であるため、ビジネスに伴う法律の問題もあるが、これには触れずにビジネスや言語面での問題を中心に上げたい。日本人の中国人観や中国人の日本人観についても結果的に触れることなると考えている。

サンプル3（博士後期課程 留学生）

入学志望理由

中国の〇〇大学の大学院修士課程では修士論文「中国語になった日本語の一考察」を提出したが、さらにこの研究を深めるために、その背景にある文化や日中関係について日本での調査研究を進めたい。留学については△△大学の〇〇先生に相談したところ武蔵野学院大学大学院を紹介していただき、自分でも貴学のHPを見て、受験をしたいと考えました。なお、3年間で博士号の取得を目指し、修了後は中国の大学で教壇に立ちたいと考えています。

入学後の研究について 希望する研究	希望する研究指導 教員	第一希望	第二希望

研究テーマ：中国語になった日本語の一考察—その文化的背景を探る

研究計画概要（問題意識も含む）：

修士論文「中国語になった日本語の一考察」での問題点や取り扱うことのできなかった事例などをまず整理し、日本での先行研究について確認をしていきたい。特に類似の博士論文がすでに発表されているかどうかを調査し、必要に応じて、その論文を入手（コピー）して、その内容を確認したい。

次にこれまでは「中国語になった日本語」というところのみに焦点を当てていたが、その日本語が昔から日本語として成立していたのかどうかといったその用語の歴史的背景を研究する。仮説として日本が近代化を進めた明治時代、戦後の高度成長を果たした時期に誕生した言葉がそのまま中国語になった可能性を予測しており、アジア地域において日本が先進国として果たした役割が言語の中にも影響を与えたのではないかと仮設のもとに、文献による調査研究を中心に進める。

※修士論文との継続性が薄い、あるいは全く異なった研究に取り組むような場合にはこの「研究計画概要（問題意識も含む）」の中で、かなり具体的な説明が必要となる。特に研究の核となる先行研究についてすでに抑えていることが重要である。全く最初から始めるという状態ではなく、すでに自分自身で論文や研究書を読み、ある程度の目安を立て

ていることが重要である。

研究計画書

サンプル1 (博士前期課程 留学生)

研究 テーマ	外国人からみた日本語の敬意表現
<p>1. その研究の意義</p> <p>人間関係から国際関係に至るまで、コミュニケーションの持つ重要性を否定出来る者はいないだろう。コミュニケーションの中でも言語（発話・文字）は最も重要なものとなろう。国際関係も外交官という人を通して行われることになり、この外交官同士の対面コミュニケーションが重要であることは言うまでもないことだ。</p> <p>日常生活から外交に至るまで、相手への敬意はコミュニケーション上、重要なファクターである。このため、外国人が日本人とのコミュニケーションをより円滑にするために、日常生活レベルからより正式な場で交渉事等を含めコミュニケーションを図る場合には適切な敬意表現を使用できることは相手からの信頼を得ることができるひとつの方法でもあろう。</p> <p>これまでの中国での日本語学習では敬語といった言語にばかりを取り扱って来たが、重要なことは敬語が使用できるかどうかということよりも、相手に敬意を表していることが伝わるかどうか重要ということである。日本の文化庁ではこうしたことを「敬意表現」としてまとめている。伝えたいこと全体を通して「敬意」が示されていることが重要であるとの新しい知見をまとめ、今後の日本語学習者へ貢献したいと考える。</p> <p>2. 入学直後の取り組みについて</p> <p>中国での日本語学習での尊敬語等の取り扱い方をまとめ、日本での最新研究の状況等を先行研究によって確認したい。また、文化庁の「敬意表現」等に関する発表等についても読み込み、敬語から敬意表現への変遷についてまとめたい。</p> <p>先行研究については指導教員と相談しながら、精読に努めたい。また、アルバイトを通して日常的に触れる敬語の事例や敬意表現と思える事例などについても注意しながら、日本での日本人との会話の中での事例として修士論文にも取り入れられるようにメモや記録などを残すように努めたい。</p> <p>また、敬語、敬意表現に関する本や論文についても積極的に読んでいきたい。</p> <p>3. 現在考えている研究計画</p> <p>博士前期課程1年（4月～8月）（秋入学者の場合には9月～3月）</p> <ul style="list-style-type: none">・指導教員とこれまで中国で学んできた日本語学習について確認する。特に、中国で使用していた日本語学習の教科書を持参して、中国における日本語学習の実態を把握する。 <p>→受験時の研究テーマと入学後の研究テーマが大きくかわらないように受験時にしっかりと計画立案して下さい。入学後に研究テーマが大きく変わった場合に大学として指導できる教員がいるかどうかわかりません。入学許可は大学院として指導ができる前提となる。このため、受験時における面接等が重要となる。</p>	

- ・指導教員と相談しながら、2年間の研究計画を立案する。
 - ・敬意表現について文化庁HPを読み込む
- 先行研究についての読み込みが必要となる。
- ・研究発表会（7月）（秋入学者は2月）の準備。

博士前期課程1年（9月～3月）（秋入学者の場合には4月～8月）

- ・先行研究の研究書や論文を読み込む。
- ・新たな問題がないかどうか確認する。
- ・研究報告書の提出。（2月）（秋入学者の場合には7月）

博士前期課程2年（4月～8月）（秋入学者の場合には9月～3月）

- ・指導教員と相談しながら、1年間の研究計画を立案する。昨年の研究計画を良く検討して、必要があれば、修正し、方向性を変える。
- ・指導教員と相談しながら、修士論文の論文タイトルとその構成の確定。
- ・修士論文の構成に沿って、実際に論文を書き始め、書き方等について指導教員に確認。
- ・研究発表会（7月）（秋入学者は2月）の準備。

博士前期課程2年（9月～3月）（秋入学者の場合には4月～8月）

- ・修士論文を書き進める。
- ・修士論文の提出。（12月初旬）（秋入学者の場合には5月下旬）
- ・口頭試問の準備。
- ・最終試験（口頭試問）。（2月）（秋入学者の場合には7月）

*博士後期課程を受験するかどうかは博士前期課程2年の5月～6月までに最終的な結論を出したい。受験の願書提出の締切よりも1ヶ月前にはどうするか決めて、受験する場合には指導教員とも相談しながら進めたい。現時点ではよくわからない。

*具体的なフィールドワーク、アンケート調査の実施を考えている場合など、様々な要素を考えて記載して下さい。

研究計画書

サンプル2（博士後期課程 留学生）

研究 テーマ	中国語になった日本語の一考察—その文化的背景を探る
1. その研究の意義	
中国語はその表現として「表音」重視の言語である。同じ漢字文化を持つ日本の漢字は「表意」重視の言語である。中国語は文字としてすべて漢字を使用するが、日本語の場合には漢字とひらがなを中心に、カタカナも使用している。日本で使用されている漢字がすべて中国で誕	

生した漢字ばかりではなく、漢字により表現されたものも、日本人が新しく作り出した漢字もあれば、表現もある。

日本語では外来語をあえて漢字にせず、発音をそのままカタカナ表記する場合にはどこか西洋への憧れ、西洋へのコンプレックスからカタカナ表現を多用した時代もあったようだ。最近では文字自体ファッション感覚を取り入れ、デザインとして見る風潮もあり、英語表記をそのまま使用する場合やSNS時代を迎え、絵文字なども取り入れている場合もある。

同じ漢字圏でありながら日本語と中国語の変遷は大きくことなる。明治以降特に日本で造語された漢字表現が中国語に取り入れられた事例が多く見られるようになったことはすでに修士論文でまとめたが、その文化的背景を考察することで、さらに研究の底辺を固めたい。類似した研究があまりないだけに日本語と中国語間における借用語研究としてひとつの分野を提唱したいと考えている。

2. 入学直後の取り組みについて

- ・研究指導教員に修士論文でどこまで研究を行ったかを報告する。
- ・修士論文の問題点を洗い出しを行う。
- ・博士論文の構成等を考える。
- ・日本での先行研究について調査を行う。特に類似テーマの博士論文が提出されていないかを調査し、あった場合にはその内容を確認する。
- ・研究アプローチをさらに模索するため、日本語の外来語研究の文献などを読み、研究手法等を学ぶ。できるだけ多くの文献にあたる。

3. 現在考えている研究計画

博士後期課程1年（4月～8月）（秋入学者の場合には9月～3月）

- ・研究指導教員と修士論文での問題点を確認する。研究指導教員と相談しながら、3年間の研究計画を立案し、先行研究について調査を開始する。
- ・研究発表会（7月）（秋入学者は2月）の準備。

博士後期課程1年（9月～3月）（秋入学者の場合には4月～8月）具体的な内容が記載で

- ・先行研究の研究書や論文を読み込む。新たな問題がないかの確認。できれば記載する。
- ・研究発表会（2月）（秋入学者は7月）の準備。
- ・研究報告書の提出。（2月）（秋入学者の場合には7月）

博士後期課程2年（4月～8月）（秋入学者の場合には9月～3月）

- ・研究指導教員と相談しながら、2年間の研究計画立案。フィールドワークなど
- ・先行研究の研究書や論文を読み込む。の予定があればそうした
- ・研究発表会（7月）（秋入学者は2月）の準備。内容も積極的に記載。

博士後期課程2年（9月～3月）（秋入学者の場合には4月～8月）アンケート調査などを

- ・博士論文の構成の再検討。
- ・研究発表会（2月）（秋入学者は7月）の準備。
- ・研究報告書の提出。（2月）（秋入学者の場合には7月）
- ・博士論文を来年度提出するかどうか研究指導教員と相談。

予定している場合にも
計画として記載するこ
と。

博士後期課程3年（4月～8月）（秋入学者の場合には9月～3月）

- ・4月上旬に博士論文論題届、博士論文提出資格審査申請書を提出。
- ・研究指導教員と相談しながら、1年間の研究計画の立案。
- ・博士論文を本格的に書き始める。必要に応じて文献資料の読み込み。
- ・研究発表会（7月）（秋入学者は2月）の準備。

博士後期課程3年（9月～3月）（秋入学者の場合には4月～8月）

- ・博士論文を書き進める。
- ・公開発表会の準備。
- ・博士論文提出予定者公開発表会（10月）（秋入学者は3月）
- ・博士論文の提出。（12月上旬）（秋入学者の場合には5月下旬）
- ・口頭試問の準備。
- ・最終試験（口頭試問）。（2月）（秋入学者の場合には7月）

ポイントとなるのは「3. 現在考えている研究計画」である。事例では時期等を重視したものとなっているが、研究としてフィールドワークを伴う場合には、修士論文や博士論文の執筆時期等もあり、フィールドワーク実施の時期が重要となる。また、アンケート調査などはその有効性や実施方法、その結果により論文として成立するかどうか難しい状況になる場合もあり、慎重に考え、実施する必要がある。個人情報保護や倫理上の問題もあり、実際の際の記録の取り方などを怠ると、研究倫理的にも問題となることを念頭におくこと。具体的な調査や精査を予定している場合はできるだけ記載すること。

17 武蔵野学院大学大学院・学位（博士論文）プログラム

本プログラムは中央教育審議会「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～答申」（平成23年1月31日）その他、文部科学省の方針により、「武蔵野学院大学大学院・学位（博士論文）プログラム」を策定する。

1 博士課程学生の基礎的能力の審査の取り扱いについて

- ・本大学院は学則により、区分制博士課程であり、博士前期課程の修了要件として修士論文の提出及び最終試験（口頭試問）を課すため、博士課程基礎学力審査は行わない。当面は論文作成能力を重視する。
- ・本学以外の博士前期課程及び修士課程修了者の場合には、論文の作成能力を確認するため、博士後期課程の入学試験時において修士論文に代わる「特定課題成果報告書」等の提出を求めることがある。詳細は学生募集要項に従うものとする。

2 標準修業年限や修得単位数

- ・本大学院の学則により、博士前期課程は修了要件30単位以上、博士後期課程は修了要件8単位以上とする。区分制博士課程であり、博士論文の構成を考えるにあたり、科目履修の考え方は、国際コミュニケーション専攻博士後期課程において3分野（コミュニケーション研究関連科目、言語研究科目、文化研究科目）より、本学の教育方針、学位授与の方針からもこの3分野からかならず履修したうえで、博士論文の構成を考案する。
- ・標準修業年限について博士前期課程は2年、博士後期課程は3年であるが、博士前期課程については特に優れた業績を上げた者については1年、また既修得単位等に応じて在学期間と見なすことができるため、博士前期課程・博士後期課程と継続的に研究する場合には最短で4年で博士の学位を取得することができる。

3 社会人の博士課程への入学の促進

- ・社会人の博士課程への入学の促進として秋入学を行う。
- ・社会人の博士課程への入学の促進として、博士前期課程については長期履修生として最大4年、博士後期課程については最大6年を修業年限とする。
- ・社会人の博士課程への入学促進として、博士前期課程、博士後期課程について既修得単位等において1年を超えない範囲で博士前期課程、博士後後期課程の在学期間と見なすことができる。

4 博士の学位授与の現状とその改善の方向

・本大学院では標準修業年限を超えて引き続き在学でき在学延長制度をすでに設けており、修学上の負担の軽減措置をすでに実施済。博士論文の提出を目指す学生へ支援を行なう。

5 円滑な学位授与を促進するためのプロセス管理等

(1) 学位授与に関する教員の意識改革の促進

修士論文は先行研究を十分に意識し、自らの知見を加えて修士論文をまとめる。博士論文は先行研究を踏まえて、独自性、オリジナリティの発揮を求めるが、特筆すべき顕著なものというよりも、先行研究を発展させている点を重視する。

(2) 学生を学位授与へと導く教育のプロセスを明確化する仕組みの整備

・博士後期課程3年次の学年進行時（4月乃至9月）に博士論文提出資格に関する審査を実施する。コースワークは履修モデルコースを以て代える。

・学位論文に係る研究の進捗状況に関しては、博士後期課程の学生は半年ごとに研究発表会にて中間発表することを義務化する。なお、在学延長については博士論文提出予定の申請直前の中間発表をすることを原則とする。

・学生の研究遂行能力を適切に把握するため、1月下旬乃至は7月に研究報告書の提出時に合わせて、口頭試問等を実施する。また、中間発表時に十分な時間を設定することで、代えることができる。

・学位審査申請時期を明確化するとともに、年間に複数回申請できる仕組みを整備した。原則、4月と9月に実施することを大学の教育年間計画に組み入れ、『学生便覧』及び『履修の手引き&博士論文の要項』に掲載の上、HPに公開する。

(3) 学位授与へと導く教育のプロセスを踏まえた適切な教育・研究指導の実践

・学位論文の作成に関連する研究活動などを単位として認定し、その指導を強化するため、教育課程において3分野を設け、それぞれ履修を義務付け、単位を認定する。

・オフィスアワーの設定等により確実に論文指導の時間を確保する。オフィスアワーだけではなく、インターネットを活用して論文指導等も積極的に進める。

・複数の指導教員による論文指導体制を構築する。入学後に研究指導教員を研究科委員会で決定するが、研究内容に応じて研究指導教員と相談し、他の教員にも指導を仰ぐ。研究科全体で学生をサポートする意識で学生の指導を行う素地が教員間に整っている。なお、研究指導教員は論文審査の公平性の観点から論文審査委員（主査）にならないことを原則としている。

・研究倫理について適宜研修の機会を設け、研究者としての自覚を高める。

・留学生に対し英語等による論文作成を認めること。博士論文提出の申請時において申請する。

・留学生の語学力に対応した適切な論文指導を実施する。オフィスアワーを含め、十分な時間を確保するように努める。

・博士論文は段階を追って完成させるため、研究指導教員の指導を受けた後、大学が発行する『武蔵野学院大学大学院研究紀要』に投稿することができる。また、『武蔵野学院大学

日本総合研究所研究紀要』への投稿についても機会が与えられることがある。

6 学位授与のプロセスの透明性の確保等

(1) 学位論文等の積極的な公表

博士の学位論文の要旨及び当該論文審査の結果の要旨について、インターネット上に公開する等容易に閲覧可能な方法を用いて広く社会に積極的に公表する。

- ・論文審査委員名を公表する。
- ・論文審査に係る学外審査委員の積極的登用を図る。「学位記授与に関する規程」により、学外者を登用することができる。
- ・口述試験（口頭試問）は公開し、さらに博士論文提出前の原則 10 月乃至 3 月には博士論文提出予定者公開発表会を実施する。

7 プログラムの見直し等について

本プログラムは平成 23 年の博士後期課程開学時にすでに構築されていた内容を「武蔵野学院大学大学院・学位（博士論文）プログラム」として新たにまとめたものである。

- ・本プログラムは大学院 F D 及び S D、あるいは研究科委員会等を通して検討し、策定する。
- ・文部科学省の通達や学内の学則、規程等の変更に伴い見直しを検討する。
- ・研究指導の実状等を鑑み、研究科長等が必要があると思われる時には見直しを検討する。

附則 本プログラムは平成 29 年 4 月 1 日より実施する。なお、これ以前の博士後期課程在学者については準用する。

- 2 本プログラムは令和 4 年 4 月 1 日より施行する。

18 留学生の皆さんへ

修士論文及び博士論文については基本的には日本語での執筆を想定しているため、日本語能力を高めることが必要です。受験時に日本語能力試験 N1 相当であることが望ましい。また、留学生として様々な奨学金等を申請する際にも日本語能力試験 N1 取得が条件になっている場合も多いため、入学後の可能性を広げるためにも、日本語能力試験 N1 は取得して下さい。なお、Jテストでの A ランクの取得も併せて取得されることが望ましい。

本大学院では修士論文及び博士論文を執筆することが重要であることはもちろんであるが、在学中には博士前期課程は1年に1回の研究発表（報告）、2年間で2回、博士後期課程は1年に2回の研究発表（報告）、3年間で6回の研究発表を予定しているため、日本語による論文執筆能力だけでなく、口頭による発表（プレゼンテーション）も必要となるため、日本語能力のブラッシュ・アップに努めてもらいたい。

ファイナルシヤル・プラン

[financialplan2021.pdf \(musashino.ac.jp\)](#)

<https://www.musashino.ac.jp/mggs/wp/wp-content/uploads/2021/04/financialplan2021.pdf>



武蔵野学院大学大学院
国際コミュニケーション研究科

平成29年 4月 1日

平成29年 5月 1日改訂版
平成29年 7月 1日改訂版
平成30年 5月 1日改訂版
平成30年 7月 1日改訂版
令和 元年 7月 1日改訂版
令和 2年 5月 1日改訂版
令和 4年 2月 1日改訂版
令和 4年 4月 1日改訂版
令和 4年11月 1日改訂版